

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32718

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12636

研究課題名(和文)身体での共創表現におけるファシリテータのはたらき

研究課題名(英文)Roles of a facilitator in embodied co-creative expressions

研究代表者

西 洋子(NISHI, Hiroko)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：40190863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：西と三輪らが、2012年12月から東日本大震災の被災地で継続している「てあわせ表現」ワークショップを対象に、集団の位置計測とその解析、継続参加している保護者へのインタビュー調査等の質的検討から、身体での共創表現におけるファシリテータのはたらきを検討した。位置計測では、ファシリテータは、参加者と多様な距離をとりあっていることが確認された。また、ファシリテータの移動に伴い、全体の重心位置が変化する場面のあることが推察された。インタビューの質的検討では、活動の継続に伴って、参加者が相互に表現をファシリテートし合う「共創するファシリテーション」への意識がめばえていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the “Hand Improvisation Expression” workshops carried out on a continuing basis since December 2012 in the affected areas of Great East Japan Earthquake, Nishi, Miwa and their research teams have been studying the roles of a facilitator in embodied co-creative expressions through position measurement of a group and its analysis and the qualitative study on interview survey conducted on parent/ caretaker who regularly participate in the event. In position measurement, it has been confirmed that the distance a facilitator keeps from participants varies. Furthermore, it has been speculated that there are cases where the position of center gravity of a facilitator shifts as she/ he moves. In the qualitative study on interview survey, as the workshop activity continues, it has been revealed that a sense of awareness toward “co-creative facilitation” where participants reciprocally facilitate expressions arises.

研究分野：身体表現論，舞踊学，共創学，身体教育学

キーワード：共創 身体表現 ファシリテータ 被災地

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(西)は、身体での共創表現の実践の中核に「身心の共振」を据えて、精神科入院病棟でのダンス療法(1995-2006)やコミュニティでのインクルーシブな身体表現活動(1998-現在)等を実施し、多様な身心が出会い、つながり合いながら、新たな表現の創出を目指すワークショップ(以下WS)を展開している。こうした実践現場では、身体的共創のミニマムモデルとして、活動者相互が手をあわせ、身体の能動と受動を同時にやり取りしながら、各々が主体的に、かつ、共に表現を創り合う「てあわせ表現」を多く行っている。これまで西は、「てあわせ表現」を軸に、工学や計量経済学、臨床心理学分野と協働し、統計的手法による共振の発現過程のモデル化に関する研究を進めてきた。一方、研究分担者の三輪らは、一軸のてあわせ表現装置を開発し、共創表現の創出的ダイナミクスの解明等に取り組んできた。これらの実践と研究を通じて、「てあわせ表現」では他者との関係性の深化が連続する5つのモードから構成されるという知見を、モーションキャプチャーによる結果と関連づけて発見している。

さらに西と三輪らは、東日本大震災を契機に「身体的共創から社会的共創へ」を掲げ、2011年の9月から月に1度の割合で宮城県内を廻り、被災地訪問と1年間のパイロットスタディとしての小規模な「てあわせ表現」WSを実施した。その結果、特に言語の未成熟な幼児や言葉のない重度発達障害の子どもたちは、被災経験とその後の生活環境の大きな変化に適応できずに困惑した状態が続いており、こうした子どもの家族や現地の教育・福祉関係者もまた、援助者であり続ける緊張状態が長期化して、自己の自然な感情の表現を過度に抑制する傾向が顕著であることをつかんだ。そこで、2012年の12月から月に1度の割合で現地の障害のある子どもと家族、教育・福祉関係者、一般市民が参加する「てあわせ表現」WSを石巻市と東松島市で開始し、現在までの5年半、月に1回の割合で継続して実施している。毎回40名程度が参加するWSの継続に伴い、震災後の生活環境の変化への適応に困難を抱えていた重度自閉症児らが、他者との身体的交流に開かれ、生き生きと自己を表現する姿へと大きく変容する様子が認められた。このWSを実践現場とする研究は、2013年4月より科研費(基盤B)の助成を受け、工学や臨床心理学、医療経済学領域との学際的研究として進めてきた。

この間、現地では、「てあわせ表現」WSの継続に伴い、保護者等から今後もWSの継続を希望する声が多くあがるようになった。一方で、他地域からの支援の継続には限界があり、今後は現地の教員や保護者がファシリテータとなって「てあわせ表現」WSを主体的に展開する体制を築くことが、実践継続のた

めの大きな課題となったのである。そこで、このような現場の要請に基づき、西と三輪とは、身体での共創表現のファシリテーションに関する研究に着手することとなったのである。

2. 研究の目的

本研究は、身体での共創表現におけるファシリテーションに関する研究の第一歩として、年齢や性別、障害の有無等の異なる多様な人々が参加する継続的な身体での共創表現WSにおいて、ファシリテータはどのようなはたらきを担っているのかを、実践の現場で具体的に捉えることを目的とする。その際、「共創表現とは、個と個、さらには個と場との関係性から創出する表現である」という関係性を重視し、身体での共創表現のミニマムモデルである「てあわせ表現」を行う場面に着目して、①表現の場で生起する事象をファシリテータと参加者との関係性の視点から検討することと、②ファシリテータと参加者との関係性が経時的にどのように変化するのかをインタビュー調査や感想の自由記述の質的分析から検討することの2点を中心に研究を進める。

3. 研究の方法

(1)「てあわせ表現」を主活動とする共創表現WSの実施

身体での共創表現のミニマムモデルである「てあわせ表現」(写真1)を主活動として、年齢や性別、障害の有無の異なる多様な人々が、身体で即興的に表現を創り合うWSを宮城県石巻市・東松島市で継続的に実施する。



写真1：石巻市・東松島市での「てあわせ表現」ワークショップの様子

(2)WSでの映像収録ならびに「てあわせ表現」場面の集団の位置計測と解析

WSにおいて、毎回のWSの様子を3台のビデオカメラを用いて動画撮影する。また、2回に1回の割合で、参加者全員での「てあわせ表現」場面(10分程度)について、WS会場(15[m]×15[m])の全体の動画を1組のハイビジョンステレオカメラで撮影し、集団における個々人の立ち位置や参加者相互の位置関係を検討する。具体的には、収集した映像の動画内の各人の頭部を色や形状の特徴から抽出するとともに、ステレオ法によ

り3次元トラッキングして、個々人の頭部位置を連続的に記録する。次に、身体頭部の位置を各人の存在位置とみなし、参加者全員の活動中における移動方向や移動軌跡などを求め、2次元マップ上にアニメーション表示する。加えて、ファシリテータが集団のなかでどのように振舞っているのかを調べるため、参加者との距離関係などに着目した解析を行う。



図1. 集団での立ち位置の計測

(3)「手合わせ表現」場面での Fa と参加者の感想等の収集と質的分析

本研究では、これまでのWSに継続参加し、WS参加者からファシリテータを担うようになった4名の保護者と支援者(Sub.A,B,C,D)を対象に行った2回のインタビュー調査(第1回調査:2014年3-5月,第2回調査:2015年12月)の逐語録や、ファシリテーション勉強会での討議内容、感想の自由記述等を対象に、被災地での継続的な共創表現活動でのファシリテータのはたらきについて、質的な検討を試みる。なお、本研究が収集・記録するデータは、音声・画像(動画・静止画を含む)、及び、アンケート調査による個別情報等多岐にわたる。したがって、本研究の実施に当たっては、対象者の人権及び尊厳を重視し、個人情報の保護に留意するため、収集される全ての情報に対して早稲田大学倫理審査委員会による以下の審査・承認を得ている。

- ・アンケート調査・半構造化面接による個別情報(研マネ第107号:申請番号2014-025)
- ・音声・画像情報(研マネ第188号:申請番号2014-068)

4. 研究成果

(1)「てあわせ表現」WSの継続実施

2015年4月-2016年3月に実施した「てあわせ」WSは、東松島・石巻市ともに各10回であった。2016年4月からは、先述の運営面の課題から、両市のWSを合同で年間10回開催するはこびとなり、現地ファシリテータが本格的に役割を担うこととなった。この間、市内での定例活動を基軸としながら、2015年8月22日はせんだいメディアテークを会場に、公開・交流WS「てあわせでしあわせ」を開催して100名以上の参加者を得た。

WS開始当初の参加者は、それまでの約1

年間のパイロットスタディを通じて、現地で知り合った方々とその関係者であった。当時は、「みんなで一緒にからだを動かして表現しましょう」という大まかな活動内容が人づてに伝えられたのみで、特段の社会的位置づけや明確な広報活動は行っていなかった。震災から1年9か月が経過してはいたが、石巻市や東松島市では、震災と津波の影響が生活全般にわたって続いており、現実的なモノの復興とは質の異なるこうした試みが、果たして現地で受け入れられるかどうかの予測もつかないまま、わずかなつながりを頼りにWSの定例化を試みる運びとなったのである。したがって初回時には、「知人に誘われるままに、何を行うのかはよくわからないで参加した」という方や、「子どものあそびの活動だと聞いていたので、付き添いのつもりで参加した」という保護者が殆どを占めていた。以降、本WSは、教育や療育・療法、コミュニティづくり等に何らかのかたちで寄与しているとは考えられるが、そのどれをも直接的な目的として掲げることなく、てあわせ表現による身体での共創表現のみを参加者相互で共有、確認しながら進んでいる。

(2)WSでの映像収録ならびに「てあわせ表現」場面の集団の位置計測と解析

ワークショップでの集団での手合わせ表現を映像記録するとともに、個々人の位置の変化を計測した。その結果をもとに、ファシリテータが参加者集団のなかでどのように振舞っているのかを調べた。具体的には、ファシリテータや参加者の個々の移動座標系において、他のすべての参加者(他者)との相対距離の頻度分布を算出した。その結果、参加者の場合は、近い距離に他者が存在する頻度が高くなるのに対して、ファシリテータでは、他者と少し離れた距離において頻度が高くなることが分かった(図2)。

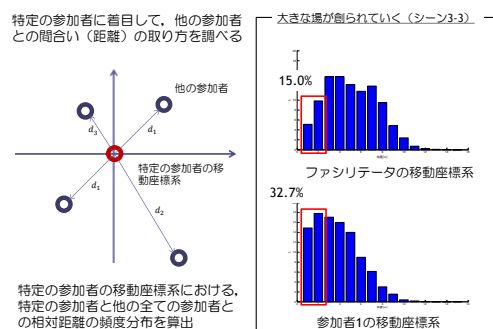


図2. 移動座標系における相対距離の頻度分布(大きな場がつくられていく場面)

さらに、ファシリテータと全体との動きとのあいだの関係を調べるため、参加者全ての動きの重心の位置変化とファシリテータのそれとの関係について調べてみた。その結果、明らかな相関は見いだせなかったが、ファシリテータの動きによって全体の重心位置が変化するようなシーンが存在することが推

察された。仮にそうであれば、ファシリテータはWSにおける表現の場を先読みして動いているといえないこともない。このことは、「意識することなく全体の流れや場を感じながら動いている」といったファシリテータのコメントとも一致するが、この点については更なる解析と詳細な検討が必要である。なお、上記に並行して、画像処理におけるオクルージョンの回避方法について検討し、集団の身体表現における位置計測の自動化処理を試みた。

(3)インタビュー調査とファシリテーション勉強会の記録を対象としたファシリテータのはたらきに関する質的検討

本WSで行う「てあわせ表現」は、参加者相互による「自由なてあわせ」場面と、全員がフロア全体に大きな輪になって座り、輪の内側で一人の参加者とファシリテータ、あるいは二人の参加者が「てあわせ表現」を行い、他の人はその表現を見る「サークルでのてあわせ」場面に大別される。

表1は、本WSに継続参加している4名の参加者へのインタビュー調査において、「サークルでのてあわせ表現」場面で、活動開始時のファシリテータである著者(西)と初めててあわせを行ったときの自身の思いを語っている箇所を抜粋したものである。

subjects comments.No (year)	comments
A:120(2014)	私の動きをちゃんと、先を読んで、こう、うまー、こう[うーん]、形をつついていたように思いますね。
A:126(2014)	無意識までは行かないんですが、こう、あの一、自然とこう、自然に手が動いてたんですね[うーん、ねえ]、両者の手がこう。
B:032(2015)	こう合わせた段階で、こう、こう大切に、こう大事にしてくださいとか、こう、何、うん。
B:036(2015)	あの一、こう自由に[うん]出しているよって、たぶん言ってくださっているんだと思うんですけど、まあそれができないので、先生が、こう[うん]、最初引っぱってくださっている感じで「はい、が、押したら押されるみたいな」。
C:005(2015)	もう何か、N先生とやっているときは、もう、お任せ、お任せっていうか、何か、N先生がどうしたいのかなということだけですね(笑)
C:019(2014)	あのときは、何かねえ、もう、そうですね、気持ち良かったですね。何か、でも、すっかり任せて。
D:109(2014)	先生の手に、自分の手が合わさって、こう、何、震えてるといふか(笑)。すっごい、何ですかね、赤ちゃんみたいですね。何か、こう、はい、初めてのときに、ぶるぶるといふか、のは覚えてます。あとは何だかわかんないうちに、こう、わかんないというか。
D:115(2014)	こう、動かされているときは、何か、結構、何ていうんだろう、気楽っていうんではないんですね。何ていうんですかね、自然のまま、結構あんまり考えなくても、何か、やっぱ、自然に動けるんですけど。

表1. インタビューにみる「サークルでのてあわせ」場面の感想

初めての「サークルでのてあわせ表現」場面では、「最初、引っぱってくださっている感じ」(Sub.B)、「もう、お任せ、お任せっていうか」(Sub.C)のように、自己を極めて受動的な立場として感受していることが特徴的である。しかしながらその感覚は、消極的な受動というよりもむしろ、全てをファシリテータ任せにすることで気楽さや心地よさが生まれ、極めて自然に動きが進行することが、「無意識」や「赤ちゃんのような」新鮮な体験として語られていることがわかる。他方、ファシリテータの立場からすると、初めての参加者とのてあわせ表現において、ファシリテータ側が一方的な能動性を発揮し表現をリードするとは考えにくい。ファシリ

テータは、こうした場面で参加者の内側に生じる感覚こそが、それぞれの個にWSの意味を与え、今後のWSや共創へと向かう気持ちに深く作用することを経験的に十分理解している。したがって、より丁寧に相手の動きを受け取り、さらには、受動や能動、(ファシリテート)する/されるといった二項関係を超えて、創り合う表現世界の中で響き合い、共に遊ぶかのように新たな表現が生まれるよう、自身の身心をかけて精一杯にてあわせを試みるのである。そして、サークルを取り囲む参加者は、このような相互に受動的な関係性を超えようとする共創表現を、時に真剣な、時にあたたかなまなざしで見つめている様子が映像記録から観察される。

さらに現場では、例えば2年半が経過した2015年7月のWSでは、「サークルでのてあわせ」場面において、参加者相互に表現をファシリテートし合う状況が生まれ、それが参加者によってはっきりと意識化されるまでに表現の場が変容していることを映像で確認することができた。表2は、Sub.Bがその際の様子を、初回時(2012年2月)と対照的に語ったものである。

The way the workshops were held in February 2013	the way the workshops were held in July 2015
B:049(2015):呼ばれて、こう、先生につれて行かれて「はい、そこで表現してくださいって、こう言われて、もう[うん]。もともとそういうのは苦手な人間なんです。まず、まず、うん、だめな人なんですけども、それをやっている自分ですごくいいと思ってたね。それで、そこに、こう、連れていかれても[うん]、あの、大丈夫なんだよという、その[うん]、大、大丈夫なんだよという、そのままでいいんだよという、うん、何かそういうのがこう感じられる。感じられてきたんですけど。	B:235(2015):自然に、こうセンターに行って、ダンス、「てあわせ」をし始めたんですよ。 B:236:だから、円座になっているほうが少ない感じになってきて[うん、なるほど、なるほど]、見ているほうが、みんな踊り出している感じで。 B:237:あれは、ああいうのがいいなと思う、思いました。 B:239:あれは、こう、やっぱりそれぞれの気持ちの中に、こう、ファシリテータがいる、いたんですね。こう。 B:240:ええ、そういうところで、こう、ひとごとじゃなくて、何だろう、何、自分でやり、自分もやりたいんですね。そしてね、何かこう、踊りたいところが出てくる[やりたい]。ええ。 B:241:あの瞬間は、ああ、素晴らしいなと思いました。

表2. 「サークルでのてあわせ」場面のファシリテーションの変容

初回時の「サークルでのてあわせ表現」場面では、ファシリテータ任せから生まれる表現を介して、「そのままいいんだ」と自己の存在が受容される感覚について述べているが、2年半後には、参加者すべてが相互にファシリテートし合う状況が生じ「それぞれの気持ちの中にファシリテータがいる」と語り、「ああいうのがいいな」とそうしたファシリテータのはたらきを積極的に意味づけていることがわかる。継続的な身体での共創表現の社会的実践において、「共創するファシリテーション」への意識がめばえている点で貴重な変容であると言える。同様の傾向は、2016年と2017年の8月に実施したファシリテーション勉強会での討議の記録からも、より顕著に読み取ることができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1件)

① 西洋子, 三輪敬之: 被災地での共創表現と共振の深化—このフィールドは何を問いかけ

ているのかー, アートミーツケア, Vol.7,
pp1-18, 2016, (査読有).

[学会発表] (計 7件)

①三輪敬之, 西洋子: 共創に他者は必要か・実践と理論のあいだ (1), 共創学会第1回年次大会 (招待講演), 2017年12月10日, 早稲田大学.

②西洋子, 三輪敬之: 共創に他者は必要か・実践と理論のあいだ (2), 共創学会第1回年次大会, 2017年12月10日, 早稲田大学.

③森雅彦, 今野祐子, 西洋子, 三輪敬之: 私たちはなぜ, てあわせ表現ワークショップに集うのか・石巻・東松島からのメッセージ-共創学会第1回年次大会, 2017年12月10日, 早稲田大学.

④西洋子, 三輪敬之: 身体的共創から社会的共創へー宮城県石巻市での「てあわせ」ワークショップの5年間, 第27回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 (招待講演), 2017年11月17日, 仙台国際会議場.

⑤西洋子: 被災地での共創表現, 東洋英和女学院大学死生学研究所連続講座第7回, 2016年10月29日, 東洋英和女学院大学大学院.

⑥西洋子, 三輪敬之: 継続的な身体表現活動でのファシリテーションの変容, 第32回ライフサポート学会, 2016年9月5日, 東北大学.

⑦西洋子: 身体での共創表現は臨床の場の何を変えるのか, アートミーツケア学会, 2015年11月8日, 大分県立総合文化センター.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 洋子 (NISHI, Hiroko)
東洋英和女学院大学・人間科学部・教授
研究者番号: 40190863

(2) 研究分担者

三輪 敬之 (MIWA, Yoshiyuki)
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号: 10103615